

# 共に生きて I

紙面についてのご意見、感想をお寄せください。メール、ファクスで受け付けます。郵送の場合は〒810-8721(住所不要)、西日本新聞生活特報部へ。

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp



登山 万佐子

その日もいつも通り、私は5歳の長男と電車で出勤。福岡市の百貨店広報室での仕事をこなし、いつも通り夜7時過ぎに息子と帰宅しました。

異常事態に気丈にも肩を貸し、氣遣ってくれました。ところが、医師は私を診るなり表情が険しくなり、院内にはわかに慌ただしくなりま

## 23週、体重452グラムで出産

か夢なのかはつきりしないまま、また意識が遠くなりました。翌朝、病室で執刀医の「女の子。大丈夫、ちゃんと生きていますよ」の言葉に少しだけ安心するも、この目で見るとまでは信じられません。というより、何が起きたのか理解できていませんでした。鉛のように重い体を必死に車椅子に移し、新生児集中治療室(NICU)に向かいました。娘は保育器の中にいました。在胎週数23週と1日。体重452g。午後10時52分、仮死状態での誕生だったそうです。長男の出産時とはあまりにも違う赤ちゃんの姿。「生きている」ことを自分の目で確認できた安心感と同時に、今にも消えてしまいうような痛々しい小さな姿に、私は押しつぶされそうになりました。

午後8時。息子に呼ばれて立ち上がった瞬間、フチッと鈍い音とともに一面の血の海……。おなかの中には2人目の子がいました。出産予定日までまだ4カ月もある妊娠6カ月での異変でした。

私はその場に座り込んだまま、息子が持ってきてくれた携帯電話と固定電話を両手に、出張に出た夫と産科医院に同時に電話しました。慌てて戻った夫と車で産院に向かいました。幼い息子は母親の



2007年の登山さんの年賀状。この写真を撮影した3日後に綾美ちゃんを出産した

2006年11月のことでした。自宅で出血して出産まで約3時間。何か一つでもタイミングがずれていたら、助からなかったかもしれない長女綾美(8)と私(44)。生きて、今ここにいることには何か意味があるはず。出産から1年後の07年11月、私はNICUで出会った仲間たちと「Nっ子クラブカンガルーの親子」という家族の会をつくりました。体重千g以下で生まれた赤ちゃん「超低出生体重児」(以前は超未熟児と呼ばれていました)を産み、喜びと葛藤を胸に手探りで育児をする毎日。小さな小さな命の奇跡と軌跡を振り返っていきます。(「Nっ子クラブ カンガルーの親子」代表、福岡県筑紫野市)

次回回は5月14日掲載